



目次

●破滅の幕開け【体格差/背面駆弁/公開羞恥】	3
■開宴の合図.....	13
○ホラーハウス【クンニ】	36

※サンプル版です。

●挿入あり ○挿入なし ■性描写なし

●破滅の幕開け【体格差/背面駅弁/公開羞恥】

ひび割れた壇上を、スポットライトが照らし出す。

背景の奥には、毒々しい紫とピンクの電飾をチカチカと点滅させる大観覧車や、メリーゴーランドがギギギ……と錆び付いた音を立てながら回り続けている。

ステージを取り囲むのは、むせ返るような熱気を漂わせる裸の男たち。

すべてがヒーローのプライドを折るために用意された、ギガ・ネビュラ幹部、ヘルの悪趣味な舞台だった。

小規模ステージの観客席を埋め尽くす裸の男たちが、待ってましたとばかりに地鳴りのような雄たけびを上げる。

『さあお待ちかね！本日のメインイベント、セイバーズ・ピンクちゃんのスペシャルヒーローショーの開幕です！』

陽気なナレーションが会場に響きわたる中、スポットライトが捉えたのは、大男に後ろから両腿を力任せに抱え込まれ、

背中を男の胸板にぴったりと押し付けた背面座位の格好で、宙に吊り上げられている少年の姿だった。

逢坂春馬、セイバーズ、ピンクの適合者である彼は、細身ながらもしなやかな筋肉を宿した体躯を持ち、整いすぎた鼻筋と、薄い桃色の唇。髪を掻き上げるたびに覗く耳元や首筋のラインには、未完成な少年特有の儚さと、それとは相反する芳醇な男性としての色香が同居している。

しかし今や、その美しい肢体は異星のテクノロジーによって内側から無理やり歪められ、受胎のためだけに後天的につくり変えられていた。男子学生としての面影を残したまま宙に晒される身体は、痛々しいほどの背徳感と艶めかしさを放っている。

「やめっ……はなっ……せっ、ひ、ぎいッ!？」

ゴチュン、ゴチュンッ!♡ごりゅっ、ごりゅっ!ごりゅっ!♡
♡♡

「あゝッ、あゝひッ、いやあああゝッ……あ、が……ッ!♡
♡」

むせ返るような熱気と視線に晒された春馬は、なんとか逃れようと必死に身じろぎをする。

しかし、その抵抗すらも膣壁を激しく擦り上げる自傷行為でしかなかった。

ぶるぶるっと身体を震わせ、意に反して甘い悲鳴を漏らし続けてしまう。

春馬が着用していた桃色のヒーロースーツは胸元、腹部、そして股間部分がズタズタに破り裂かれていた。

引き裂かれた生地の際間からは、散々弄ばれて固く勃起上がった二つの突起と、M字に担ぎ上げられた股間から蜜孔と後孔が、大勢の男たちの視線の前に晒されるという惨め極まりない格好だった。そんな春馬の痴態に男たちは沸いた。

うおおおおお！と野太い声をあげながら自らの竿をシコシコと扱き出す。

『ご覧ください！ヒーロー様が、男の腕の中で可愛らしく啼いています！小さなおまんこが男の巨根によって限界まで広がっています！背面駅弁での豪快なご登場、実に壮観です！』

ナレーションが春馬の痴態を赤裸々に暴き立てる。

春馬の臍下の位置には、赤く光る淫紋がくっきりと刻まれていた。

ステージの中央へ躍り出た大男は、春馬の股裏をさらに乱暴に担ぎ直すと、深く突き刺さった結合部をそのまま固定し、

その場でドスン、ドスンと勢いよくジャンプし始めた。

ゴッジュ！ゴッジュ！ゴッジュ！ゴッジュ——ツツ！！♡♡♡

「おゝ、おゝっ♡あゝ♡あ、ひいっ♡や、いやあゝあゝあぁッ♡♡♡」

ステップを踏みながら、体内を攪拌する強烈な縦振動。

男の腕の中で、成長期特有の若くしなやかな肢体がバウンドする。

その動き自体が、図らずも男の巨根を自身の膣壁で力強くしごき上げてしまう。

ドスッドスッドスッ♡どずううッ！♡……っ！♡ごちゅ、ごちゅ、ごちゅ、ごちゅッッ♡

「んおゝ〜〜〜〜〜ッゝ、あゝ があゝ っ……、あゝ ひいっ♡
あゝ あ〜〜〜ッ♡♡」

ズデュッ♡と先端が子宮口へ深々とめり込むたび、春馬の視界に火花が散る。

グズウッッッ！♡ズッッ……♡ゴッッッジュッッッ！♡♡♡

「あゝ あーッ！♡いゝ、やゝ、あゝ、あゝ♡……、どゝ まゝ っ
てええ！どゝ、まゝ♡っ……んぎいっ！♡」

春馬の尿道口から透明な潮が激しく吹き出し、それと同じタイミングで会場の男たちが欲棒から次々と白い汁をぶち撒けた。

プシャァァァァァッッ♡♡♡ドビュッ♡♡♡

最前線の裸の男たちが、飛び散る潮を口を大きく開けて受け止め、歓喜の雄たけびを上げる。

ドビュッッ♡ビュッ♡ビュッー♡ビュルッ♡ドビュッー
ーーー♡♡♡

「うおおおおおおオオオオオッ！！」

会場のあちこちからは、耳腔を汚すような悍ましい噴射音と咆哮が重なり合い鳴り響いていた。

百人もの男たちが吐き出した白濁液が、ステージや観客席へバシャバシャと激しく叩きつけられ、立ち上る熱気とともに精液特有のこもった生臭い汚濁が、会場全体の空気を一瞬で染め上げていく。

息をするだけで喉の奥が眩暈を起こしそうなほどだった。

『これはあ！ヒーロー様からのありがたい聖水だぁっ！ご覧ください！客席はまさにザーメン豪雨！会場全体が漢たちの濃厚な精臭で充満しています！臭いっ！臭すぎるうっ！おいおい、そこの最前列の大きなお友達い！ヒーロー様の聖なる潮スープを直飲みするなんて、なんというギルティ！あまりにも贅沢すぎますよぉ〜ッ！』

ナレーションが狂ったようにマイク越しに囁し立て、男たちの痴態と会場の熱狂を実況し続ける。

むせ返るような臭いと激しい歓声の中、男たちは熱の籠った瞳でステージ上の春馬の痴態を貪るように見つめ続けていた。

『さあ出ましたぁッ！仕上げとばかりに豪快に腰を突き上げピンクちゃんを追い込んでいきますッ！』

どちゅうううッッッッ！♡ゴッッジュユッッッ♡♡

「ひぎゃあああああッ——♡♡♡」

激しい絶頂の瞬間、春馬を犯していた大男はぶるぶると全身を震わせ、野獣のような雄たけびを上げながら春馬の最奥に勢いよく精液を叩き込んだ。

ドビュッッ、ビュー————♡♡♡

「あゝ、がっ♡あゝ あああああああ♡♡♡」

『キましたああぁッ！直撃い！ポルチオへのド直球ストレート種付けだぁッ！！ご覧ください、濃厚漢汁に、ヒーロー様の顔が蕩けきっています！白目を剥いての大・絶・頂！実に！実に腰に響く良い雌顔をしていますッ！！』

春馬は弓なりに背中を反らせ、子宮口へ注ぎ込まれる熱に悶える。

下腹部に浮き出る淫紋が、チカチカと怪しい光を放ち、宙に抱え上げられたしなやかな脚の爪先が、快楽の余韻にぴくぴくと痙攣を繰り返す。

大男が春馬の蜜孔から、巨根を鈍い音を立てて引き抜いた。

ずりゅっ♡どちゃっ……♡どろお……♡ひくっ……ひくっ……
♡♡♡

「あ……♡あゝ♡ひ、あ……も、やらあ……っ、ゆる、し……」

栓を失った蜜孔からは、夥しいほどの精液が溢れ出した。

濃厚で粘っこい白濁液が、だらしなく開いたままの春馬の孔からドロドロと滴り落ち、ステージの上に汚らしい水たまりを作っていく。

ステージを見上げる裸の男たちは固唾を飲み、欲棒を勃起させながらギラギラと赤く輝く狂気の瞳で、ヒーローの凄惨な痴態を貪るように見つめていた。

『いやぁ素晴らしい！実に素晴らしいデモンストレーションでしたッ！！非常に力強い背面駆弁おまんこ丸見えファック！

血が滾りましたよぉ！ピンクちゃんのおまんこも会場みんなのおちんぼもすっかりほっかほかに温まったところで！早速行ってまいりましょう！さあっ！次にピンクちゃんに元気を注入してくれるお友達はあるかな！？』

異様なテンションで響き渡る実況ナレーション。

その問いかけに、客席の男たちが一斉に手を挙げた。

「はあーいっ！！」「俺に寄越せ！」「ピンクちゃんに元気を注入してやる！」「ブチ犯してやるぜえ！」

会場を揺るがす地鳴りのような野太い声が続くもあがった。

大男の腕からステージの床へドサリと崩れ落ちた春馬の視界に映ったのは、ステージへ向かって我先にと押し寄せ、どこまでも続く欲望の長蛇の列だった。

「ひっ……や、いやだっ……くるなあ……っ！」

（なんなんだよ……こいつら……っ）

理性を狂わせ、獣のような欲望を剥き出しに発情しているというのに、男たちは押し合いへし合いをすることもなく、まるでアトラクションの順番を待つかのように行儀良く一列に並んでいる。

洗脳されてもなお残る異常なまでの秩序が、かえって彼らの狂気を際立たせていた。

溢れ出た精液で汚れた床の上で、春馬は尻もちをついたまま必死に腕で後ずさろうとする。

絶望に歪む視界の先で、下腹部の淫紋が嘲笑うように妖しく明滅する。

ヒーローの尊厳を踏みにじる、終わりなき輪姦の宴はまだ始まったばかりだった。

■開宴の合図

ダクトを滑り落ちた先は、かつて変電所の心臓部だったであろう巨大な廃機械室だった。

鋼鉄の配管と高圧ケーブルのすき間を埋めるように、ぬらぬらと光る赤黒い肉塊がびっしりとへばりついている。

機械のシリンダーが重い金属音を立てて上下するたび、それに癒着した軟体組織がチュプ、チュプと湿った音を立てて収縮し、管の中を濁った液体が流れていくのが見えた。

足元を踏みしめると、靴底を泥沼のように吸い寄せるねっとりとした感触が伝わってくる。

無機質な工業製品と、悍ましい異星生物の生体。

二つの異なる素材が無理やり縫い合わされたかのような気味の悪い空間に、春馬は低く舌打ちを漏らした。

「……チッ、悪趣味だな」

壁面を覆う粘液まみれの肉塊が、機械の脈動に合わせて微かに蠢いている。

『それが』いつ襲いかかってくるとも限らない。

春馬は腰のホルダーから近接用のセイバー・ブレードを抜き放った。

チャキン、と軽い金属音とともに伸びた鋭利な刀身を、慣れた手つきで低い位置に構える。

吐息を漏らしながら、ブレードの刃先で足元の粘液を牽制するように横目で見やる。

靴底に纏わりつく不快な感触をいなしながら、春馬は腰を低く落とした姿勢のまま慎重に歩を進めた。

天井から滴り落ちる濁った水滴の音と、壁の奥でドクンと脈打つ生体組織の脈動音だけが薄暗い部屋に響く。

一步、また一步と入り組んだ配管の影を抜け、奥へと足を踏み入れていく。

春馬は足を止め、暗闇の奥へと鋭い視線を向けた。

その奥から、ゆっくりと「それ」は歩み出てきた。

「……なんだ、あいつ」

遠目から見ても長身だと分かるシルエット。

春馬は思わず息を呑んだ。

右半身は息を呑むほどに精巧な絶世の美女そのものだが、

左半身は皮膚が剥ぎ取られたかのように生々しい筋肉組織と半透明の外骨格。

頭頂部から地を這うほど長く伸びた髪は、艶やかな漆黒から足元へ向かうにつれて枯れ木のような灰白色へとグラデーションを描いている。

何より異質なのは、その身を包むラバースーツだった。

濡れた漆黒の膜のような生地は、服というよりは彼女の体に直接へばりついた皮膚そのものだ。

みぞおちまで深く V 字に開いた胸元からは、右側の溢れんばかりの豊満な白乳と、左側の血の気の通う赤黒い筋肉が露骨に剥き出しになっている。

腰下から伸びるタイトな裾には太ももの付け根まで深いスリットが切り込まれ、歩を進めるたびに、美しい白い脚と、怪しく脈動する生肉の脚が交互に覗いていた。

言葉を交わすまでもなく、異質の存在だ。

キーーン……

美貌の右唇が微かに開いた瞬間、春馬の耳奥に不快な高周波ノイズが突き刺さった。

言語として意味をなさない音階。直後、女の瞳が怪しく光を帯びた。

（ぐっ……！？）

視界がぐにゃりと歪み、強烈な眩暈と嘔吐感が脳を殴りつける。

（……真っ向からやり合って勝てる相手じゃない）

即座に一旦距離を置くことを判断した春馬は、足元の粘液を蹴り飛ばしながら瞬時に踵を返した。

肉体に組み込まれた『A 因子』

アセットとしての高い生体適合性が超人的な脚力を叩き出し、常人を遥かに超える跳躍力と反応速度、そして春馬自身が元々持っていた優れた運動能力とそれを扱えるセンスが合わさり、力強く踏み込んだ足裏から全身へと爆発的な推進力を生み出していく。

頭上をかすめる太い高圧パイプを軽々とくぐり抜け、壁面から突起した鉄骨を足場に踏み切ると、そのまま三メートル以上先の配管へ着地した。

入り組んだ障害物の隙間を、パルクールさながらの身軽さで飛び越えながら全速力でその場を離脱する。

しかし、アセットの強化身体をもってしても、背後の圧迫感は一向に弱まらない。

追撃の足音すら立てず、地を這う長髪がまるで意思を持つ生物のように蠢き、無音で追尾してくる気配が間近に迫っていた。

その時、耳元で甲高いアラームが鳴り、スーツのシステムが『AH-04』からの着信を告げた。

碧からの通信だと察した春馬は、逃げる足取りを止めぬまま、掠れた声で手短に命じた。

「……応答！……無事だったか……っ！」

端末がその音声を認識すると同時に、耳奥のレシーバーから碧の声が滑り込んでくる。

『春馬くん！今どこにっ……』

「――っ、来るな！碧、そこから」

叫び切るより速く、超音波と電磁ノイズが端末の基盤を破壊した。

ブツンッ、と切断音とともに画面が漆黒に染まる。

「くそっ……！」

通信が切れた一瞬の隙を逃さず、背後から伸びた灰白色の髪が、触手のように春馬の足首へ強く絡みついた。

勢いよく転倒し、湿った鉄板へと叩きつけられる。

「がはっ！？」

春馬は素早く身を翻し、握りしめていたブレードを振り下ろして足首の髪を力任せに斬り払おうと抗った。

意地で泥臭く抵抗するが、上から覆いかぶさってきた圧倒的な質量と膂力によって、両腕を軽々と床へ押しつけられる。

「くっ……、このっ……離せ……！」

見上げれば、人間離れした巨美女が、舌なめずりし目を細めて春馬を見下ろしていた。

完璧な美貌と生々しい肉組織が表裏を成す顔が至近距離まで迫る。

春馬の耳元に寄せられた美しい唇から漏れたのは、未だノイズにしか聞こえない、けれど狂おしいほど甘い響きを含んだ囁きだった。



幼い頃に父親が死んだ。当時の春馬はまだ三歳程度で、死というものの意味すらよく分かっていなかった。

母親が棺の前で泣いているのを春馬はポカンと見つめていた。

けれど、父親がまだ小さかった頃の春馬を膝の上に乗せて絵本を読んでくれたときのぬくもりは、うっすらと記憶に残っている。

一方で、残された母親は、夫を失った寂しさをいつまでも胸の底にくすぶらせていた。

夫との思い出をどこか自慢げに語るその顔の裏には、残された者の脆さと痛々しさがあった。

春馬は子どもなりに気を使っていたし、母親の負担にならないよう我儘も言わず、進んで家事も手伝った。

だが、どれだけ聞き分けの良い息子を演じたところで、母親が抱える孤独や、ぽっかりと空いた穴を埋めてやることはできなかったのだ。

だからこそ、中学生になった頃に母親が再婚相手として連れてきた、スーツを着こなし模範的な大人の佇まいを見せる紳士に対し、春馬は心から安堵していた。

男はいつだってスマートだった。

家にやって来るたび、春馬の好きそうな菓子やゲームを手土産に持ってくる。

三人で食卓を囲む時間は穏やかで、母親の弾んだ笑顔を見るのは春馬にとっても胸が温くなるものだった。

「春馬くんは、本当にしっかりしているね」

男はよくそう言って、春馬の頭を優しく撫でた。

春馬自身もその誠実な人柄には好感を抱いていたし、

母親を幸せにしてくれる存在なら、新しい父親として受け入れてもいいとすら考えていたのだ。

けれど、二人が正式に籍を入れて同居を始めてから、少しずつ違和感が重なり始めた。

男のスキンシップは、日に日に父親の域を超えていった。

風呂上がりにリビングで寛いでいると、わざわざ隣に腰をかけて肩や背中を撫でてくる。

勉強の進捗を聞くフリをして距離を詰め、髪や首筋に触れてくる。指先にこもる不自然な熱と、舐めるような視線だけは誤魔化せていなかった。

（なんなんだよ、このおっさん……）

ただのスキンシップにしてはあまりに粘着質な触れ方に、春馬は明確な気味悪さを抱き始めていた。

だが、その違和感が単なる不快感ではなく、確信的な恐怖に変わる事件が起きる。

洗濯に出したはずの自分の下着が、戻ってこないことが何度か続いた。

最初は母親が片付け忘れたか、どこかに紛れ込ませただけだと思っていた。

しかし、ある日の深夜、喉の渴きを覚えて部屋を出た春馬は、暗がりの中で見てしまった。

洗面所の影で、春馬の使用済みの下着を顔に押し当て、荒い息を吐きながら下半身を弄る義父の姿を。

欲望に濁った瞳。その卑屈な手つきに、吐き気で目眩がしそうだった。

この男が自分に向ける視線の正体は、父親としての愛などではなく、ただの歪んだ性愛だったのだ。

それ以来、春馬は義父を徹底的に避けるようになった。

距離を置き、警戒を強めていた矢先のことだ。

その日はあいにくの雨で、母親はパートの遅番で不在だった。

自室でテスト勉強をしていた春馬は、ノックもなくドアが開いた音に顔を上げた。

そこに立っていた義父は、どこか浮ついた、焦点の定まらない目をしていた。

「勝手に入るなよ」

「ご、ごめんね。春馬くん、勉強頑張っているね。……分からないところはあるかな？」

「……いや、大丈夫。集中したいから出て行って」

つっけんどんに断り、視線を教科書に戻す。

だが、男は春馬の制止を聞く様子もなく、足音もなく背後に忍び寄っていた。

「だから、出て行けって」

嫌な気配に身を翻そうとした瞬間、強引に肩を掴まれて押し留められた。

そのまま指先が首筋から胸元へと滑り落ち、衣服越しに形を確かめるように撫で回される。

「そうだっ、お父さんが肩マッサージしてあげようか？」

「っ、触んな！」

明らかに媚びるような猫撫で声と、いやらしい手つきに、春馬は全身が粟立ち、腹の底から湧き上がった拒絶感のまま、自分に触れる男の手を強く振り払う。

そのまま勢いよく胸元を思い切り突き飛ばした。

この男が自分にどんな目を向け、何を望んでいるのか、その瞬間にすべてが繋がった。

これまでの親切も、手土産も、母親との結婚すらも。

全部、自分に合法的に近づくための口実に過ぎなかったのだと。

頭の芯がずっと冷えていくのと同時に、腹の底から激しい吐き気が込み上げた。

「春馬くん……？照れることはないんだよ、父さんたちは家族なんだから」

「ふざけんなよ、気持ち悪い。ホモ野郎が」

自分でも驚くほど低い声が出た。

気色の悪い笑みを張り付けたまま手を伸ばしてくる義父の手を振り払い、春馬は自分の鞆だけをひったくるように掴み取る。

「俺は、女の子が好きなんだよ。あんたのその汚い顔、二度と見せるな」

義父が呆然と立ち尽くす。部屋を飛び出し、春馬は玄関を駆け抜けた。

叩きつけるような雨の中、傘もささずに夜の街へと走り出した。

(……あーあ。母さんには、絶対言えないな)

嬉しそうに連れてきた新しい再婚相手が息子に色目を使っているだなんて。ショックを受ける母親の泣き顔が脳裏に浮かんだ。

だから家に帰ることも、本当の事情を打ち明けることもできなかった。

春馬が頼ったのは、持ち前の整った容姿に惹かれて言い寄ってきた、顔見知りの年上女性の家だった。

元々、春馬はその抜群の顔立ちとどこか掴みどころのない雰囲気、年上、年下を問わず女性にはかなりモテた。

自分の男としての価値や顔の良さを自覚していた春馬は、そうした好意を巧みに利用した。

「ちょっと家にトラブルがあつてさ」と適当な理由を添えて甘えれば、年上女性たちは喜んで部屋へと迎え入れてくれたのだ。

自分を性的な目で見てくる気味の悪い義父の手から逃れられるのなら、自分を甘やかしてくれる女性の部屋は、当時の春馬にとって唯一の安全な避難所だった。

だからこそ防衛組織から打診を受けた際、提示された全寮制、衣食住完全保証という条件を見た春馬は、一切の躊躇もなく契約書にサインをしたのだった。

あの居心地の悪い家から離れ、自分の身を守れる安全な居場所を手に入れるために。



意識が深い闇へと落ちていく

春馬の意識は浅い眠りと覚醒の境界線を漂っていた。

目蓋を開けようとしても、脳からの命令が途絶えたかのように、指先ひとつ動かない。

全身を重い金縛りが支配していた。

まぶたの裏側を、苛烈なまでの白光が刺す。

無機質な手術灯のような眩しい光。視界は白くぼやけている。

「……ギ……ズ、ズッ……——」

頭上から、耳障りなノイズ混じりの声が降り注ぐ。

最初はただの不快な音階に聞こえていたそれが、春馬の脳内でじわじわと解凍され、歪な意味を結び始めていく。

人類が知るどんな言語とも異なる未知の言葉が、耳からではなく、脳の神経へ直接打ち込まれていく。

（何だ……これ……っ）

だが、脳を侵食する異物感など、次に襲いかかってきた熱に比べれば些細なものだった。

熱い。下腹部の奥深く、内臓の隙間に煮えたぎるマグマを直接注ぎ込まれたかのような、強烈な熱感が広がっていく。

「っ……、ひゅ……っ！？」

声を出そうとしても、喉が麻痺して空気の漏れる音しか出ない。

体内で何かが急速に細胞分裂を繰り返している。

骨が歪み、肉が蠢き、雄としての生殖器官が内側から溶かされ、全く別の新たな器官へと再構築されていく感触。

まるで自分の身体でありながら、中で未知の生物が芽吹いていくような、狂おしいほどの生理的嫌悪感が全身の皮膚を跳ね上がらせた。

下半身を侵すその破壊と創造の最中、温もりのある手が春馬の太ももを撫であげる。

視界の端、ぼやけた白い光の中に、女のシルエットが揺れていた。

「大丈夫よ、……すぐにアタシを受け入れられる身体にしてあげる……」

脳に直接響く声は、もはや意味のわかる言葉へと変わっていた。

女の美しい唇が歪み、狂おしいほどの熱を孕んだ瞳で自分を見下ろしている。

下腹部を焼くような熱と、作り変えられていく感覚に激しい戦慄を覚える中、春馬の意識は再び深い闇へと落ちていった。



「……っは！？」

ハアハアと荒い息を吐き出しながら上半身を起こす。

冷や汗が全身を濡らしていた。

嫌な夢でも見ていたかのように、春馬は即座に起き上がり周囲を見回した。しかし、違和感はすぐに訪れた。

肌に直接伝わる空気の感触。そして何より、下腹部に覚える凄まじい欠落感と、相反する見知らぬ熱。

元々春馬が身につけていたピンクのヒーロースーツは、防衛隊が誇る最新鋭技術の結晶であり、外部からの攻撃を弾くはずのものだった。

生身の人間では脱がせることすら叶わない頑強なアーマー。

それが今や、無惨にも切り裂かれ、見る影もなく無力化されていた。

首元から鎖骨、胸元、下腹部、隠すべき肌の大部分が大胆に露出しており、嫌でも目に入った。

そこにあったはずの、男の象徴が、消え去っている。

春馬は恐る恐る股間に手を伸ばす。

触れたのは、柔らかな割れ目だった。

「……嘘だろ……っ」

下腹部が女性の体へと作り変えられた現実、血の気が引いていく。

「……つくそ、なんだよ。これ……！」

屈辱に身を震わせながら、春馬はようやく周囲の情景に目を向けた。

チェック柄の床、鮮やかなビビッドカラーのソファやテーブル。
見覚えがあった。

十年前、まだ幼かった頃に母親に一度だけ連れて来られた閉鎖
済みの廃遊園地、その敷地内にあるアメリカンダイナーだ。

看板メニューだった巨大なハンバーガーのオブジェが、窓の外
で照らされている。

空は深い濃紺に染まり、すっかり夜の静寂に包まれていた。

遠くでは巨大な観覧車が、都会のネオンを模した色彩豊かな光
を放ちながらゆっくりと回っていた。

『あら、目覚めたかしら？』

ノイズ交じりの声が響き、店内の壁に掛けられたレトロなブラウン管テレビの画面が明かりを帯びる。

そこに映し出されていたのは、あの廃機械室で遭遇した女だった。

『目覚めの気分はどうかしら？ あらあ……その格好、とっても似合っているわよお』

（っ……見られているのか?!）

春馬は思わず、破かれたスーツから剥き出しになっている下腹部を手で隠し、焦るように周囲へ視線を巡らせた。

監視カメラの類は見当たらない。

だが、ふとガラス窓の外へ目を向けると、店の看板の端に一羽のカラスが留まっていた。

その両眼が、まるでレンズのように真っ赤な光を宿し、じっとこちらを観察するように首を傾げている。

（……あのカラスの目を通して見ているのか……!）

『よそ見しちゃダメじゃない。せっかくアタシが直々に自己紹介してあげてるっていうのに』

「お前の仕業か……っ！？一体なんのつもりだ、ふざけるのも大概にしろよ！」

胸底からの怒りをぶつけるように叫ぶ春馬に対し、画面の中の女はフッと冷ややかに目を細めた。

『口を噤めクソガキ。お前に拒否権があるとでも思ってるのか？』

先ほどまでの艶めかしいアルトの声が一変し、男のようにドスの利いた低音となって春馬の鼓膜を震わせる。

それと同時に、脳内を直接殴りつけられたかのような激しい超音波の衝撃が駆け抜けた。

強烈な頭痛に、春馬はその場に膝から崩れ落ちると、頭を強く抱え込んだ。

「あ……つく……、はあ、はあっ……！」

視界が激しく歪む中、画面の中の女は、完璧な美貌の右顔で満足そうに目を細めている。

『アタシの名前はヘル。近いうちにあんたのご主人様になる女よ』

「っ……は……？」

『でもあんた、アタシの洗脳をかけるのに、ちょっと手間がかかるみたいなのよね。だから良いことを思いついたの。ただ種付けするだけじゃ、あまりにもつまらないもの』

「主人……？種付け……？一体何を言っているんだ」

『人間が好む“デスゲーム”というものは、なかなか興味深い題材だわ。……ふふ、でも安心しなさい。これは誰も死なない、とっても生ぬるいゲームよ？感謝してほしいくらいだわ』

「ゲームだと……？」

不穏すぎる言葉の数々。切り裂かれたスーツから覗く、無防備な自らの肌。

そして、無残にも女のものへと作り変えられてしまった下腹部。

理解が追いつかないはずの現実の断片が頭の中で弾け、嫌でも一つの答えへと繋がっていく。

(……まさか俺を……っ)

自分がこれから直面するであろう悍ましい未来を察し、春馬の顔から一気に血の気が引いていく。

ドクドクと不快な早鐘を打つ心臓の音が、うるさいほどに脈打っていた。

『あら、理解が早くて助かるわ』

青ざめる春馬の反応を嘲笑うように、ヘルの指先が画面越しに下を指し示す。

引き寄せられるように自らの腹部へ視線を落とした春馬は、息を呑んだ。

滑らかな下腹部、ちょうど臍の下あたりの皮膚の上に、じんわりとハートの模様が浮かび上がっていた。

まだ刻まれたばかりなのか、その輪郭はうっすらと淡く光る程度には儚い。

だが、皮膚の奥からじわじわと滲み出るような熱感が、そこにハッキリと存在していることを主張していた。

『その淫紋が完成した時、あんたはアタシの従順な眷属になるのよ。……男の精液を貪らなきゃ生きていけない、淫らなアタシのしもべにね』

「……なっ……！？」

『ふふ、外を見てごらんなさい』

促されるまま、首を巡らせてガラス窓の外へと目をやる。

ダイナー前の広場には、ヘルがどこからか集めてきたであろう男たちが、全裸で折り重なるように倒れていた。

ぴくりとも動かず、まるで屍のように目覚める気配はない。

『アタシが操る 100 体のお人形さんたちよ。捕まれば……ふふ、どうなるか分かるわね？精々アタシを飽きさせないでちょうだい。……逃げる時間を 5 分あげるわ。感謝しなさい』

「なっ……待て……っ！」

『それじゃあ、ゲームスタートよ』

ブツンッ、とテレビの画面が無機質な音を立てて暗転した。

○ホラーハウス【クンニ】

「ハアッ、ハア……ッ！」

夜の廃遊園地を、春馬は必死に駆け抜けていた。

広場に倒れていた男たちが、一斉に呻き声を上げて起き上がったのだ。

飛び出しそうな程に瞳孔を見開いた目は赤く光り、口々に

「いたぞ…」「あいつだ…」と呟き、虚ろな表情のまま群れをなして追いかけてくる。

(やはり操られているな)

逃走経路と出口を把握するため、まずは敷地内の案内マップを探そうと中央広場へ向かったが、あっという間に囲まれかけた。

セイバーズとしての卓越した身体能力で強引に包囲網を突破したものの、広大な園内を当てもなく逃げ回るわけにはいかない。

「くそっ……！一旦隠れるしか……っ！」

ふとある建物が目についた。くすんだ赤煉瓦と黒ずんだ扉が異様な威圧感を放つ陰鬱な洋館だった。

春馬は男たちの追跡を振り切るためにあえて遠回りをしながらも、その建物に入った。

ギィィ……と重い扉を閉め切り、暗闇の中へと姿を隠す。

静まり返る薄暗い通路を慎重に進んでいく。

一旦小部屋に入り壁に背を預け、息を殺して荒い呼吸を整える。

（はあっ……はあ……っ、なんなんだよ、一体……っ！）

恐怖と困惑で、頭がどうにかなりそうだった。

激しい動悸と込み上げる吐き気。

股間の見知らぬ熱と、下腹部に刻まれた淫紋が、悍ましい現実を主張するようにドクドクと脈打つ。

だが、失意に打ちひしがれる時間すら与えられない。

ギィ、とホラーハウスの入口の扉が重く開く音が響いた。

ドアの隙間から滑り込んできたのは、追っ手の男たちの影だった。

一人や二人ではない。ぞろぞろと館内へ侵入してくる気配が迫る。

（考えるのは後だ……っ！）

春馬は唇を強く噛み締め、溢れそうになる屈辱を強引に押し殺した。

立ちすくんでいれば、あの男たちに捕まり、身も心もヘルのしもべへと堕とされてしまう。

むき出しの胸と下腹部を手で覆い隠すようにしながら、春馬は足音を殺し、ホラーハウスのさらに深い暗闇へと足を進めた。



カビと錆の匂いが充満するホラーハウスの内部は、静寂と濃密な闇に包まれていた。

かつて客を脅かすために仕組まれていたギミックはとうに沈黙し、埃をかぶったおどろおどろしい人形たちが、闇の隙間から見下ろしている。

足元には破れた壁紙と砕けたプラスチック片、外の微かな街灯すら届かない漆黒の中、息を殺して潜んでいた春馬の背後から、不意に湿った生暖かい気配が迫る。

（――ッ！？）

勘づいた瞬間には遅かった。暗闇の中から伸びた太く無骨な腕が、背後から春馬の口元を力任せに塞ぎ込む。

洗脳された男のひとりが、音もなく忍び寄っていたのだ。

「むぐっ……！？ん――ッ！」

「……見つけた……♡」

赤く光る眼をした男に背後から抱きすくめられ、身動きを封じられる。

必死に足をバタつかせ、腕を振り払おうと抗う春馬だったが、洗脳によってリミッターの外れた男の膂力は異常なまでに強く、羽交い絞めにされて逃げ出せない。

ギィ……と、軋んだ床板の音が近づいてくる。

一人に背後から捉えられ、無防備な体勢で固定された春馬の前に、闇を割って別の男が膝をついた。

「っ……離……っ、むぐ……！」

春馬が焦燥に目を剥く中、男の手が、破られたスーツの隙間から露わになっている下腹部、無防備に露出した股間へと伸ばされる。

「ン` ……っ！？」

指先が、初めて触れられる未知の裂け目へと強引に押し当てられた。

男の無骨な皮膚の感触と、肉襞を押し拡げて内側へぬるりと潜り込んでくる異物感に、春馬の全身が跳ね上がる。

ぬちっ、ぬちっ、ぬちっ♡

「んぐッ……！あ` ……っ！？」

「ヒヒっ……濡れてるじゃねえかあ……………」

男は興奮した声で呟きながら、春馬の両股を両手で拘束し、濡れそぼった蜜孔に唇を寄せた。

ぴちゃっ……♡ぴちゃっ……♡ぬるっ、ぬるっ…♡

「うほ～～♡ヒーローのまん汁うめえ～♡」

「うぐっ……、ふぐ……………ううっ……♡」

(舌がっ……あそこに入ってくるっ……)

ぐじゅっ……、じゅぷううっっ♡じゅるうう♡

「ふ、ぐうゝっ、うゝううっ————♡」

(吸、われっ……やめっ……)

まるで熟しきった果実の汁を貪るように、男は生々しい音を立てて孔から溢れ出る蜜を吸い上げていく。

レロレロレロレロ♡じゅるるるるううう♡

「うゝ————っ♡」

逃げ出そうと腰をひねるが、背後からがっしりと押さえつけられる。

男の舌先が敏感な一点を押し潰すたび、脳裏を白く眩い火花が駆け抜ける。

【続きは製品版をお楽しみください】